

昭和五二年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都千代田区飯田橋4の4の8朝日ビル401号室 電話(03)26117079
振替 東京0158431 労金 東京労金本店No50234

購読料 月額400円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

大衆運動の質が問われている	2
急テンポで進む右翼再編策動	3
—— 中立化構想の意義について ——	
日経連版「良い子、悪い子、ふつうの子」	8
資料1 物価引き下げが課題(日経連)	8
基本政策転換と連動?	9
—— 社会党よモラルをただせ ——	
「総評・社会党」ブロックの危機と課題(二)	11
反共主義と朝鮮戦争	13
—— KAL機「行方不明」事件理解のために(三) ——	
資料2 花束の少女は「真由美」ではない!	15
読者からのおたより	18
「社会党に対する発言集会」に参加しよう	7
編集部だより	12

旬刊社会通信

NO. 364

一九八八年四月一日

一九八八年四月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

大衆運動の質が問われている

国労の全国キャラバン行動と「雇用創出・雇用確保」の署名運動は、三月四日の日比谷公会堂の集約集会をもって、成功裏に終了した。集約集会には四、〇〇〇名が参加し、前日の都労委での全面救済命令の報告も加わり、非常に盛り上がりを見せた。

今回の行動は、総評も全国に「協力要請の指示」を出す中で取り生まれ、全国二五〇箇所を集会に六七、〇〇〇名が参加、署名は第一次集約だけで七、四七五団体、一〇〇万名に達している。各地区集会の中には、「メーデー規模の集会になった」ところもあり、北海道・九州では、他の単産から多くの参加者を得た、と報告されている。「反失業」がさまざまな傾向の違いをこえて、労働者共通の闘争課題であることが、実践的に示された。

今国会に、「拘禁二法案」が上程された。自民党は、今国会での成立に意欲的であるという。現在、「司法の独立と民主主義を守る国民会議」による「廃案要求」署名運動が行なわれている。この「国民会議」は、総評が軸となって組織されている極めて幅の広い共闘組織である。要請行動には、日頃は相互に論争しあっている社・共・公の三党の代表がつぎつぎに決意を述べている。

労働運動にせよ、平和と民主主義を守る課題にせよ、共に闘うべき課題は現に存在する。結集しやすいか、しにくいかの別はあれ、現に存在している。運動も、わずかではあれ引き継がれている。これを重視し、集中しなければならぬ。

二つのことが重要である。第一に、労働者が共に闘いよう課題を、情勢・攻防の全体的な分析を踏まえて、選択すること。第二に、どのような傾向の労組やナショナルセンターであろうとも参加し得る運動の枠組みを作りあげること、この二つである。

現状で、この闘いが大規模な闘いとなってゆくことは難しいかも知れない。しかし現時点での大衆運動に問われているのは、規模Ⅱ量ではなくて、質である。右左からの選別という困難な情勢の下で、いかにして労働戦線の全的統一の展望を切り拓くかを踏まえた「質」である。これこそが問われている。

国労の「キャラバン行動」、「国民会議」の「拘禁二法案・廃案」の闘いは、一つの事例である。国労が現に各地で進めている「地労委闘争」も、一つの典型として展開させる可能性大である。

二月五日、全官公が「連合」にあてた「全官公の連合加盟について」は、加盟にあつての「原則確認」の第二に、「統一労組懇・社会主義協会派など共産主義勢力の排除」をあげている。「連合」が、けして労働戦線の全的統一ではないこと、「再編・分断」にすぎないことは、ますます明らかになってゆくだろう。それと同時に「連合」が労働者のためにならない組織であることが、目を追って明らかになるだろう。が、それだけでは足りない。その時に、労働者の全的統一をめざして、闘う部隊と運動がなければ、労働者の「連合」に対する不満は、逆に権力によって組織され、吸収されることになるのである。

個々の闘争課題を、労働問題での意見の違いと切り離して組織してゆくこと、そのことが、労働をめぐる闘いに、戦略的に勝利する道である。

急テンポで進む右翼再編策動

——中立化構想の意義について——

一 総評流「全統」のデタラメぶり

二月四―五日に開催された総評第七八回臨時大会では、昨夏の大会方針（一九九〇年「全統」）、総評解体を「八九年に早める努力」をすることとした。こうして、労戦問題は、総評流「全統」の内実が「連合」への吸収合併か官民対等合併かは別に今後、急テンポで進展することはまちがいない。そしてまた、事態の推移を客観的にみる限り、「吸収合併」であることがより一層明らかとなりつつある。

この総評臨大直後に開かれた「総評八八国民春闘東・西ブロック討論集会」（二月一六―一七日、一九〇二〇日）で真柄事務局長は、「労戦統一問題は、具体的素案を当初、五月の拡評に提案する予定を三月の拡評に間に合わせるための作業を急いでいる」（東ブロック）とのべ、西ブロックでは「私の出身の自治労は、九〇年全統一方針をやっととりつけた。その矢先に八九年と私が言い出したものだから兼田書記長も頭をかかえている」「がしかし、今は『あだとか、こうだとか（五項目・三課題などの懸案事項の意味）』言っている時期ではない。八九年に向けて走りだすだけだ」と本音を吐露してみせた。

労戦問題をめぐる総評執行部のこうした態度に対し、かつてのような批判が単産や地県評からは殆んど出てこないこと、ここにも総評執行部だけではなく総評労働運動全体に浸透している病根の深刻さがうかがわれる。

本誌（第三六一号）ですでに明らか通り、公務員共闘と公労協の共闘組織Ⅱ官公労協の発足（八七年十二月）、「連合」地方準備会結成が三月一日現在三七都道府県で発足、さらに、「連合」と総評の共同行動——など労戦問題の右翼再編は着実に進行している。

総評は、「全統」（官民統一ナショナルセンター）の新綱領に関する合意を五月をメドにまとめたとしている。つまり、総評定期大会前段の五月拡大評議員会までに結論を得、総評定期大会前段の各単産定期大会でこれを承認させる——こういうスケジュールを考えている。問題なのは、官民統一ナショナルセンターの新綱領の中味である。われわれは、総評の「目標とプロセス」それ自体に問題点が多すぎると考えている。がしかし、総評大会で「総評の全統一方針」として決定しているものである以上、それを無視はしない。ここで問題なのは、総評が「目標とプロセス」それ自体をも放棄してしまっていることだ。

総評真柄流認識は、「進路と役割」について「目標とプロセス」とあい対立する文書だと批判する勢力があるが、総評民間単産も加わって作成した文書であり、平和と民主主義など総評の意見で補強されている」というものだ。「進路と役割」と「目標とプロセス」はそう距離のあるものではない、ということになる。つまり、真柄流問題認識は、民間の全民労協、「連合」という結集軸と同様に、官公労をも包含した「全統」にとっても、「総評民間単産も加わって作成」した「進路と役割」だから問題はない、というデタラメなものである。

一 一 労研センター方針の日教組の動向

総評指導部の、文字通りの全的統一にむけた任務放棄、総評労働運動の成果（継承発展）それ自体の放棄、また一方で進行する連合地方準備会の結成、さらに公務員共闘、公労協で結成された官公労協の動き——急テンポで、われわれが指摘してきた通りの右翼再編策動として進む労戦Ⅱ組織再編問題にどう対応すべきだろうか。

労研センターは、二月の全国幹事会で「左派の運動路線の総合的体系化」を総評解体に備えて「具体的作業に着手」する方向を決めた（『月刊ろうけん』八八年二月号）という。この『ろうけん』によれば、幹事会の協議の焦点の一つには「日教組大会での右派方針の承認（労戦統一問題について「総評方針の方向支持」）問題があったとのことである。この点については、本誌三六一号（三月一日号）付の「日教組第六四回大会の報告」の通りである。つまり、先の日教組大会での労戦方針は『ろうけん』が指摘する通り「右派方針の承認」と極論すればできるであろう。がしかし、「これまでの『左派』は、田中退陣要求、組合民主主義の再生、確立が結集軸だった。労戦問題が多く、幹部の共通認識であったことは事実だが、それはあくまでも全体ではなく部分にすぎなかった」とし、「ここで、『決着』を求めれば、先にのべた妥協の産物Ⅱ役員人事も振りだしに戻することは明らかであった」のである。日教組大会での労戦の攻防・妥協の結論はそういうものであった。これは事実である。

さて、日教組の福田新委員長（いわゆる「中間派」）は、『新労働通信』（二月二十七日）でこの辺の事情をインタビューで次のようにのべている。つまり、「今度の労戦問題の方針も、あまりスカッとしたものではなく、急場しのぎでしたが、これをつぶしてしまうと（注Ⅱ総評の全的統一の方向支持ということ。へつぶすとは左右両派それぞれの立場でのこと）また抗争がぶり返えすという気がみんなにあったと思う」とのべている。また「反主流派を抱えての六〇万日教組、その三分の一を切り捨てても全的統一に参加するとなれば、それはそのまま日教組自体の力量低下につながるのかどうか……」という質問に「労戦界の再編のために自分の組織を割るという馬鹿な話はないんで」という前提条件をもとに「ただ反主流派の諸君が本当に統一労組懇に結集して『割って出てもいい』と腹をくくっているのかどうかということを見きわめることが必要」とのべている。

この点に関して言えば、福田氏自身が「労働界の再編」と答えている通り、現実の労戦問題は文字通りの全的統一ではなく「再編」なのである。この「再編」の前提に「統一労組懇排除」という方針がある以上、統一労組懇に向かって「割るのかどうか」を見定めるというのは本末転倒ではなからうか。この点について福田氏は「彼らが『絶対』にどんなことがあってもだめなんだ」と言っても、一〇〇％近くが全的統一へ向けて乗り出した。日教組だけが乗りおくれでも反主流派を説得するんだということになるのか、ならないのか——それを決断しなければならぬ時期が来るんじゃないか……」とものべている。

先に指摘した通り、福田氏は総評流認識、つまり、「再編」を全的統一と理解しているから話がおかしくなる。福田氏にとって、それはとりもなおさず日教組六〇万にとって極めて重要なことは、統一労組懇に「出るか出ないか」を「説得」することではないのではないか。福田氏が指摘する通り、「労働界の再編のために自分の組織を割るという馬鹿な話はない」のである。

福田氏が「再生日教組」を文字通り実現する決意であれば、「労働界の再編は困ります。それを強行すれば日教組を割ることになります。それも部分的にはなく極めて大規模なものになるかもしれない。これでは当初の労戦統一の目的とは全く逆な事態となり、日教組の組織的力量は極度に低下してしまいます。だから、再編ではなく、日教組六〇万がそっくりそのまま参加できる労戦統一をやって下さい。そのためにであれば、遅ればせながら全力を傾注して総評方針実現のためにがんばります」と総評や官公労協の場で毅然として主張すべきなのである。

組織「再編」が前提な限り、再編に際して排除される当事者にむかって「出るか出ないか」を問うのは学校の先生がやることではない。この点について結論をのべれば、統一労組懇の方針自体が正しいとはちっとも考えていないが、それにしても福田氏の立論に無理と誤りがある。

福田氏は、このインタビュー（労戦問題）の結論で「日教組としては慎重に対処するしかない」とのべている。その論拠としては次の点を挙げている。「八九年全統統一、総評解散」という一年前倒し問題に関連して「これは日教組にとって絶対行けない、一九九〇年自体が議論になっているんですよ……一年早めて「日教組も早めろ」といわれても、およそできることではない」こと。第二は「官公労の検討委員会〔注〕官公労協のことか？」にも積極的に参加します」と決めた。そこで入って行く、議論をする……全統統一の前に日教組が官公労（注）官公労協？）の舞台から出て行かなければならなくなるかも知れない」こと。この趣旨は正確にはわからないが、官公労協主流の主張（八九年前倒し論が主流となった場合）の中で日教組の慎重論が孤立した場合のことであろう。第三は、労戦問題の長いインタビューのまとめとして「そうは言っても今日の労働界の再編は、革新的なものではなく、右寄り保守的な再編だと観ている」、従って、「日教組として慎重に対処するしかない」とのべている。この結論（認識）は極めて正しい。この認識に立って行動をする以外には福田氏が抱える矛盾を解消する方法は見出せないのである。

三 中立化構想の意義について

本誌三六一号（五頁）で「……いわゆる左派結集ではない中立化構想は検討に値いしやう」とのべた。この点についてももう少しのべてみたい。とりわけ、本誌三六一号（日教組六四回大会報告）、先に紹介した日教組福田委員長の見解（所感）と関連させつつ所論をのべてみることにする。

ここで指摘するまでもなく、「連合」との対等合併・吸収合併はいづれにしろ右翼再編、つまり右分裂である。一方、統一労組懇の「階級的ナショナルセンター」構想は当事者がどう考えているかは別に、これまた第三者、つまり、統一労組懇の思想と組織論を支持しない者にとっては、左分裂である。労研センターを中心とする、いわゆる左派がこのどちらにも組みしてこなかった理由はここにあるだろう。

全電通のように、単一組織で、かつ反対派を徹底してツブしてしまおうオール右派組合は別にして、組合民主主義と大衆闘争路線を最大限保障し合い、そしてまた、曲がりなりにも反独占・反自民という総評的労働運動の基調、原則を掲げて運動（闘い）を追求してきた圧倒的多くの組合は、多かれ少なかれ左派と統一労組懇系組合員（グループ）が存在している。総評民間単産中、「連合」加盟をしていない組合の多くはこれに属するだろう。

特に日教組のように左・右・懇が三派で立っている状況にあっては、「反独占・反自民」をめぐる右派の反発があるものの、進行中の「選別排除」を一方が認めれば分解せざるを得ないのである。

それだけではない。教育臨調、臨教審攻勢に対し、とりわけ教育の国家主義化（一典型としての「日の丸」「君が代」問題）には右派といえども基本的には反対の立場（あるいはそういう立場をとらざるを得ない）なのである。日教組にとっては死活問題である教育の国家主義化、そしてまた、民間企業で言う生産性向上運動、能力主義管理とも言うべき教職員の支配統制（教員免許法改悪や新採教員に対する研修漬けⅡ初任者研修制度など〈注・第三六二号参照〉）攻撃に対し、左・右・懇それぞれの闘い方がいこそあれ一致してこれまた反対なのである。こうした日教組方針と「連合」がさらに、「全統統一」した後のナショナルセンターの方針が一致するわけがない。また、日教組の闘いを支援する筈もないであろう。

この主張に対し、「一致あるいは支援させるかどうかは、日教組の力量にかかっているのだ。それを抜きに結論を導き出すのは敗北主義だ」という批判が出ることは目に見えている。しかし、この批判は余りにも子どもじみた批判であろう。

先に紹介した福田氏が指摘する通り、「再編のために組織を割る」愚を犯す必要はない。そうであれば、日教組の場合で言えば福田氏が指摘するまでもなく、とても一年後に結論など出せないであろう。日教組の従来の労働方針「反独占、反自民、あらゆる労働組合の大結集、国際路線の固定化反対」のすべてを放棄した「全統統一」という名の右翼再編に組みすることは、日教組固有の闘いを放棄しない限りできないことではない。

この点に関して言えば、福田氏は先のインタビューで、「……つまり外濠がどんどんせばまってくる……既成事実が積み上げられていく……」「……全体の動きというものを大事にしないと……」といった認識も披露している。組織の最高責任者としては当然のことにはちがいない。がしかし、何度も繰り返すが、自らの組織と闘い、あるいは目的をまで放棄して「既成事実」や「全体の動き」を優先することは紆余曲折はあれ、戦後管々として築いてきた民主主義教育確立にむけた闘い、つまり、「教育」という教育労働者の労働・生産点に権力の介入・支配を許さないという歴史の否定、闘いの歴史を総決算することになるにはちがいない。

このことは、何も日教組に限定したことはない。今日的な右翼再編に身をゆだねることとは、とりもなおさず自らのこれまでの労働運動の総決算（清算）であり、従来の労働運動を（主観的にはどうであれ）否定せざるを得ない——このことにこそ最も関心を払うべきだと思ふ。

一方、統一労働組との関連はどうか。これまた先にのべた通りである。これに付加するとすれば、彼等の（政治的主張とは）別に、その内実を見れば、とてもこれを支持できないということにつきるだろう（このことは、だからと言って、彼等の政治的主張までも否定するものではないとは言うまでもなからう）。

こうして見てくると、ここで主張する中立化構想は、何も足して二で割るといったものではない。われわれが一貫して主張してきた労働戦線統一の原則、それは、何よりもこれまで数多くの労働組合が当り前の労働運動を追求してきた筈だが、それを否定してまで「統一」という名の「再編」のバスに乗るために競いあう愚を避けるということである。

そして、われわれは「条件なし」の「あらゆる労働組合の大結集」の実現にむけて、それを実現するためにこそ今は「右にも左にも」結集しないということである。このことは、別の表現で言えば、従来総評が掲げてきた労働方針Ⅱ四原則・七方針の実現をわれわれの手で実現するということの決意の表明でもある。

「それではなぜ、左派結集ではダメか」という疑問もあるにちがいない。この小論でこれまでのべてきた主張は、結果的には「左派結集」かも知れない。だがしかし、本誌読者には当然かもしれないが、「左派結集」という言葉、主張は、一般的な意味で既存の幹部、良心的、「左派」的幹部にも受け容れ難いチームなのだ。それはなぜか。六〇年代から七〇年代初頭にかけての闘いの高揚期であれば、今日の意味での「左派」などと敢えて「左派」勢力を指して言う必要がなかった。

しかし、現状はそうではない。多くの良心的幹部は、けっして「現状」を肯定的には見ている。だからと言って、今日の運動の主流である右派に徹底抗戦を試みる自信、それがあるだろうか。これに自信と確信がない限り、現状の幹部たちは、自らを「左派」には組み込まないのだ。つまり、これこそが今日の労働運動の到達点、あるいは現状なのだと思ふ。

そうであれば、われわれは「左派結集」などと言わなくても良いのではないか。これまでの労働運動の成果と教訓、大衆闘争路線と組合民主主義の最大限の登場によってしか労働運動の前進はかちとれないのだという、労働運動のごく当り前の原則をこそ今日の運動を再生させ「基調」とすべきではないか。われわれが主張する「全的統一」実現の本来の意味はここにこそあるのでないか。このことは、われわれにとっても重い課題であることは言うまでもない。これまでの主張を実践的に裏打ちする以外にないのだから。がしかし、それ以外に右翼再編策動を「名実ともに」打ち破り、真の意味での「全的統一」を実現する途はない。

労働戦線統一問題研究会 増田洋一郎

「社会党に対する発言集会」に参加しよう

ゴルフ事件、井上発言、韓国訪問解禁など、大会後、社会党への不安はいっそう高まっている。大会前に、学者・文化人が「社会党ガンバレ！」とたち上がった意味はますます重くなっている。

このようななかで、三月六日の「アピール」（本誌第三六二号参照）を發した学者・文化人のよびかけで「社会党に対する発言集会」転換期における社会党の再生と飛躍を願って」と題する集会が開かれる。

社会党のゆくえは日本の政治に直結している。ぜひ読者のみなさんのご参加をよびかけたい。

日時 三月二十八日（月）午後二―五時

場所 主婦会館

日経連版「良い子、悪い子、ふつうの子」

「良い子、悪い子、ふつうの子」とは、欽ちゃんの世界だけかと思っていたら、日経連の紳士諸君が熱心な視聴者であり、その番組の終焉を惜しんでというわけでもないのだから、日経連版「良い子、悪い子、ふつうの子」が掲げられた。

舞台は「日経連タイムス」誌上。「良い子」とは、日経連の「八八年度版賃金問題研究委員会報告」に全面賛同の面々であり、これを「本質理解型」と呼ぶそうである。「ふつうの子」は生産性基準原理に疑問と批判を投げかける人々で、「現状把握型」と規定する。「悪い子」とは労資の階級対立を説く人々で、「過去執着型」と切り捨てる。

「良い子」とは具体的に賃金自粛論の先頭にたつ鉄鋼労連等の組合や日経連のおかかえのご用学者たち。「ふつうの子」とは「マクロは理解する。だがミクロで対立」を強調する連合や総評の一部指導者たち。それに労働省をはじめとする役人たち。「悪い子」は階級的労働運動の原則に立つ総評左派、統一労組懇の人びとをさすようである。

現在の日経連会長は生産性基準原理の論争がかまびすしかった頃、「生産性基準原理はベーターベンの第九番のような名曲」との名セリフを残した人だ。この音楽愛好家に一言だけ述べておこう。ベーターベンの第九は永遠の名曲だ。人類が続く限り耳を樂しませ、勇気を鼓舞しよう。だが生産性基準原理は、資本主義社会の限られた歴史段階に限られる。歴史の博物館でくち果ててしまうことは必然だ。

「日経連タイムス」のこの主張は、連合や世論をどこに誘導しようとするか、日経連の本質を簡潔に要約している点で、「報告」以上に興味深い。資料として掲載する。「報告」などくだらぬ文章は読む必要などまったくないが、本誌第三五八号の巻頭言とこの資料だけは絶対に目を通していただきたい。

資料1 物価引き下げが課題（日経連）

三種類の論評 日経連の主張に対し頂いた批判や意見は正に玉石混淆で、概ね三種類に分けられる。

第一は、日経連と労働組合とは不倶戴天の敵でなければならぬから、日経連の頑迷さを何とか表わすような言葉だけ無理に拾って、労使対立の図式を作り上げようとする「過去執着型」のものである。

第二は、日経連の労使関係における柔軟姿勢も認め、労使関係の前進を評価しながらも、日経連はまだ考え直すべき点があるのではないかとといったものであり、「現状把握型」とでもいうべきものであるが、多くが生産性基準原理ばかりを批判している点、基本的理解を問いたいものもある。

第三は、「報告書」から労使の論争点を読みとりつつも、その背後にある、より重要な巨大な問題、日本の経済社会の方向を決める政策のあり方に大きな問題があり、この労使関係を越えた問題に対しては、労使協力して取り組まなければならないという基本問題に理解を示した「本質理解型」である。

第三の型の論評もある程度頂けたことに対しては、大変ありがたいと思っっている次第である。

大事なことは、昨年来、労使の間で、名目賃金は世界一になったが、生活費や地価が異常に高過ぎて実質生活水準が低い、このギャップを埋めることが最大の問題という認識が共通なことである。

基本政策転換と連動？

——社会党よモラルをただせ——

社会党はどうなってるの？ との声が広がっている。浜幸問題での「山口発言」、平日ゴルフ事件」、そして「井上発言」等々。

大会のもようについては本誌第三六二、三号に示したから、今回は久しぶりに熊さん、八さんに登場してもらい、社会党の現状と病源を語り合ってもらおう。(編集部)

熊 ヨォー。陽気が良くなったね。所でご隠居がごひいき、社会党のおたかさん、最近悩ましい事件が続くね。平日ゴルフ、国際局長の暴走とくりや、いくら女丈夫でも頭痛いよね。

隠居 ホォー。「三宅坂を揺がした十日間」をご存知かね。互版でしつこくやっていたからな。

八 オレも近所のダチ公が社会党でよ、そいつ怒ってたぜ。前論説委員の歓送会か何だか知らねえけど、山花って副書記長の国会議員と専従中執三人、部長三人を含めて中央本部の人間が、事もあろうに平日、しかも国会のヤマ場にゴルフに興じてるとあっちゃ、党员は世間様に顔向けできねえーわさ。オレもそんな腐った野郎ドモが作ってる「社会新報」なんか、やめちまおうと思っただが、ダチ公があんまりかわいそうで、思い止まっちゃった訳だ。

隠居 連中が雨の中プレーした船橋カントリークラブってのは、会員権は四千万円近いとかで、とても庶民がプレーできる所じゃないそうさ。何か臭いものを感じるな。

八 それもそうだが、船橋の党员が船橋駅で毎週やってる駅頭行動の前をゴルフバッグかついで通ったてんだから、その凶は中央と地方のズレをマンガにしたようなもんだ。何をか言わんやだな。

熊 二日昼のテレビで流されたら、三宅坂の党本部はパニックだったっていうじゃない。地方や支持者から抗議が殺到して大変だったそうさ。

隠居 騒ぎの大きさに驚いて書記長の「嚴重注意処分」となった訳だが、実害のない処分にこれまた党内沸騰。とくにおたかさんが再処分を主張して譲らず、山花副書記長の論説委員長、衆院法務委員辞任、高木、海野、笠原専従中執の十%減給三カ月、園田編集長更迭ということになったらしいね。

熊 「新しい社会党を創る会」っていう新主流派の正体がこれで天下に明らかになったね。大会で政構権と一緒に代議員の票読みをやっていたのは三年前くらいからだけど、ゴルフも一緒にやっていたとはね。

八 ゴルフ以外にも色々あって別名「新しいスキヤンダルを創る会」というそうだが、処分モミ消しに山本副委員長はじめ大童だったっていうじゃない。山花、高木、園田とコンペの主催者が三人とも「創る会」の中心メンバーだからね。

隠居 ゴルフも大衆的になったし、やっちゃいかんとは言わんが、平日やって恥じないという神経が問題だな。平日ゴルフは今に始まった事じゃなく、数年前から悪名高い曾我元副書記長の指導で始まったというから、相当なものだ。今回の事件もその延長線って訳

だ。熊さんも気をつけた方がいいよ。

熊 バカ言っちゃいけねえ。オレはチャーんと自分のカネで休みにやってますぜ。フォーカスされるような事は何もやっちゃいねえ。もつとも、オレじゃ記事にはならねえけどよ。

八 所で、井上国際局長の機関無視はヒドイね。マスコミすらたくさん疑問を指摘している「大韓機事件」「北犯行説」を「状況証拠」だけで、断定するんだから。

隠居 ゴルフ事件より政治的にははるかに大きな問題だが、どういう意図でああいう発言をしたか、そこが問題だね。個人的な信念を述べたとするには、立場が分かっているオソマツさだ。市長やって国会議員も長い人だから、ミスじゃない。対韓政策の全面的な転換を狙って、そのルートづくりには真意があったようだ。

熊 よく分からねえ。どういうことですか。あつしにも分かるように解説しておくんない。

隠居 いいかい熊さん。北の共和国と友好関係があるのは社会党だけだ。営々として築き上げてきた貴重な党の財産だ。しかも決定的な証拠は何もない「北犯行説」というより、金大中ら致など数々の謀略で実績のある南、つまり韓国犯行説の方が「状況証拠」はそろっている訳だが、そういう長年の信頼関係やKAL機事件のナゾから、社会党は簡単に言えば、「北犯行説」を否定する見解に立っている訳だ。

井上発言は北との信頼関係、党の見解の二点を一気に崩そうという訳だから、地方の党組織は怒ったそうだ。県本の抗議が発言翌日だけで二十県もあったというからね。

そこで、それほどいうか、絶対に党に受け入れられない見解を所轄の局長が述べたということだが、十一日の事態収拾の時、井上さんは撤回の条件として、機関の論議を要求して書記長はそれを認めた、という所がミソだと思ふよ。

八 するっていうと、KAL機事件の党の公式見解の転換を行なうルートが開かれたっていう訳だ。

隠居 撤回と機関論議保証という双方痛み分けの形をとっているけど、背後には政構権のバックアップが見えるね。事実、中執委の論議も政構権が井上擁護、新生研、社研が批判という構図だったそうだ。

熊 創る会はどういう立場だったんですかい。

隠居 山本、山花、高木っていう人がどんな発言をしたか知らねえが、ゴルフ事件で謹慎中の身だから何も言えつこないだろう。しかも、政策課題で自らの見解を示すことはまづない派閥だし、常に強い方につく、今や政構権の小判ザメだから、内心は政構権の味方だろうがね。何はともあれ、井上局長のクビは残った訳だ。とすると「信念の人」だから近いうちに必ず同じような問題を起こすね。この予想、当たらないことを願うけどね。

社会通信号外

労戦「統一」と全国地県評の方針

※お申し込みは社会通信社へ

「総評・社会党」ブロックの危機と課題 (二)

「総評・社会党」ブロックも消失

こうした方針と目的をもつ「連合」は、昨年一二月、結成大会を開き発足した。総評は「一九八九年秋」に「ナダレ込む」意向だ。これで総評の「八九年解散」は必至となり、政党支持関係も激変する。

第二次世界大戦後、日本の労働者運動は三つのブロックを形成してきた。第一に「総評・社会党」ブロック、第二に「同盟・民社党」ブロック、第三に「統一労組懇・共産党」ブロックだ。この三つのブロックの内実はさまざまだ。「総評・社会党」ブロックは機関決定にもとづく純然たる一党支持。「同盟・民社党」ブロックは同じ一党支持でも人的結合の色彩が強い。「統一労組懇・共産党」ブロックは政党支持自由論にたつ。

「連合」結成で政党支持関係はどうなるか。第一に「同盟・民社党」ブロックはすでに解散された。同盟は解散にともない、「政策・政治活動、国民運動の諸課題のうち、「連合」でただちに対応できない」課題追求のため、「友愛会議」を設立した。これで従来の「民社・同盟」ブロックを維持することは不可能。民社の委員長が演説のたびにひんしゆくを買っているのは、このあらわれだ。

第二に「総評・社会党」ブロックも一二年後に解散は必至となる。このブロックは、現状すでに半身不随の状況にある。連合加盟の大単産は軸足をすでに連合においている。「民」・「民」分裂、「官」・「民」分裂、「官」・「官」分裂、そして地方の分裂も拡大の傾向にある。もし総評指導部の意向がそのまますれば「総評・社会党」ブロックもなくなる。

第三にこうして今のままでは一二年後、残る労働団体は(1)連合、(2)統一労組懇のみとなり、ブロックの機能を保持するのは「統一労組懇・共産党」のみとなる。連合の政党支持問題も顕在化する。

右派幹部の思惑は混在

そこで問題となるのが(1)連合を基盤に野党再編をどう進めるか、(2)政党支持のあり方、(3)これらと結びついた連合内の主導権争いだ。今の状況では連合は自民党の草刈場となることは必至。それは竹下の発言、自民党の運動方針(第三六一号参照)に明らかだ。それを意識してのことであろう、連合は一月中旬、この問題のために、「五人の委員会」を設置した。メンバーは会長、三人の会長代理、事務局長というものだ。

現在、野党再編の構想は大きく三つ。第一は総評主流派の構想だ。連合で総評が主導権をとれる状況にはまったくない。さらに、連合では総評はよそ者だ。こうした状況下、総評が主導権に手が届く算術の可能性は、(1)官公労もろともなだれ込んで数の優位を確保すること、(2)社会党「改革」で民社党を圧倒することだけだ。総評指導部の「全統統一論」がこれである。

第二は同盟主流派の構想だ。彼らは右翼再編の過程で民社がデカクなると夢想した。そうなれば連合と民社の力で社会党の政構研、公明を引きつけ、自民党の一部で保守連合政権ができる?! この構想の破綻ははじめから明らかだった。

そこで台頭してきたのが、「四人組」(全電通委員長、電機労連委員長、全金同盟組合長、全機金委員長)の構想だ。この四者の思惑はさまざまだ。その中心人物は全電通の委員長。

そのスローガンは「反自民・非共産」による結集だ。そして、総評主流派、同盟主流派の構想の破産で、この「四人組」の構想が急速に浮上しているのが現状だ。

われわれの四つの課題

このようなとき、われわれはどうするか。やらなければならないことは山ほどある。だが、すべてを手がけるほどの余裕はない。ポイントは二つある。一つは情勢についての意志統一をはかること、もう一つは党建協運動での獲得物を明確にし、社会主義の戦線と労働運動の戦線が手をたずさえ、「総評・社会党」ブロック解体阻止の運動に全力をあげることだ。

情勢については次の四つの点が重要だ。第一は「総評・社会党」ブロックの危機についての認識を深めることだ。そして「総評・社会党」ブロック解体阻止の運動に力を合わせる。この運動はじつに多面的だ。われわれはすでに国鉄闘争で指導部を批判するだけではたりないことを経験した。運動をとおして、われわれが力をもたなければならぬ。このためには、仲間同士の連携ブレイが、同時に大衆にやさしく訴える能力が問われる。第二は現代は歴史の変動期、新しいものをわれわれがつくるとの心構えを確立することだ。そのためには「習慣の力」を克服しなければならない。学習の成果を新たな情勢に適應する。そして「下から」運動をつくる。こうして学習を生き生きとしたものにし、学習と実践の総括から、みずからの方針を確立することだ。

第三は「連合」の弱点を攻めることだ。「連合」の致命的弱点は組合員大衆を恐れていることだ。「連合」は資本とたたかわない。「連合」の力は資本の力であることをしっかり見据え、われわれが大衆の力を結集する。その努力こそわれわれの喜びであり、楽しみだ。第四はこの楽しみを党建協の強化拡大に結集することだ。

この四つの課題を、「下から」運動をつうじて実践することが求められる。そのためには、学習と職場のたたかいが、従来以上に強めなければならないのはいうまでもない。

◆ 編集部だより ◆

▽昨日、ある組合の講座に出かけた。「春闘が見えない。だから、春闘の状況を」というのが、主催者の主旨だった。

▽連合「春闘」は組合員には絶対見えない。彼らは一八人の大幹部と日経連の一八人の労働重役で、日本の労働運動をとりしきろうとするからだ。

▽兵庫の仲間はどういっている。「いわば『上から春闘』はもはや考えられない。とりわけ『大衆の出番』という春闘はないと断言できる。私たちがどう作り上げていくかである」(「職場・地域から反撃の炎を」)と。

▽単産によって、地域によって一律ではないだろう。全体的な傾向は兵庫の仲間がいうとおりだ。

▽このようなとき、われわれの運動がない限り、春闘は見えない。春闘が見えるものになるかからないかは、すべてわれわれの肩にかかっていることに、注意が払われなければならないだろう。

反共主義と朝鮮戦争

—— KAL機「行方不明」事件理解のために (三) ——

国連には「反共主義が浸透

アメリカが六日二五日即時動員をけなかつたことはいろいろ解釈できる。アチェソン国務長官は「朝鮮で救われた」と後日語った。第八軍指令官ヴァン・フリート將軍は「朝鮮は天の恵みだった。世異のあつちこつちに朝鮮が必要だった」といった。アメリカの指導者の間に戦争を欲する考えがあつたことは否定できない。アメリカは即座に朝鮮出兵の政治的行動に出たし、軍事行動も起こした。

反共主義はDPRKに悪意に満ちた意図があるとし、金日成を「ソ連の傀儡」ときめつけたが、朝鮮を三八度線で分断することを提案した張本人だったデイーン・ラスクが中華人民共和国を「スラブ人の満洲国」と呼んだのはこのときだった。金日成とDPRKを真面目に考え、金日成を朝鮮のチトードと捉える見方は全く見られなかつた。金日成がソ連よりむしろ中国と密接な関係があつたこと、さらには金日成とスターリンとの関係は歴史的に難しいものだったことは、まったく議論されなかつた。

一九七〇年「フルシチョフの回想」という本が出た。その中で朝鮮戦争勃発前に金日成が訪ソしたという記述があり、あたかも金日成がスターリンの支持を得て南侵したかのようには推論するものがある。しかしフルシチョフは金日成が二度続けてソ連を訪問しているかのように述べているものの、最初のスターリン訪問は一九四九年三月で、戦争勃発の一五カ月前だし、二度目の訪問についてはいつだったのか記憶がないとしている。そもそもこの「フルシチョフの回想」は本人の談話をテープにとつて起こしたものといわれるが、本当にそうか疑問が多く、それを否定する人もいるという代物である。

北が戦争を準備して開始したという主張を裏づけるためにもよく引用されるものに、アメリカのライフ誌に出た、朝鮮戦争中北に駐在したポーランドの武官といわれるポウエル・モナートの記事がある。彼はたしかに北に駐在武官としていたことはあるが、彼が朝鮮に着いたのは一九五二年七月以後のことである。彼は戦争勃発の経過を説明しているが、話があまりにも誂え向きすぎる。彼には「アメリカの中のスパイ」という著書もあり、アメリカのアキレス腱を忠告するという内容だから、その文脈を考慮に入れなければならぬ。

ソ連が戦争に火をつけ、支援したという西側の通俗の見解も、英国の公文書保存局から発表されたマッカーサー関係資料から覆えられている。一九五〇年一月二一日付プリムソル(現ジェームス卿)の報告の中に、マッカーサーがプリムソルに語った言葉が書かれている。「ソ連と北朝鮮の侵略との間には密接な関係を示す証拠はまったく見られない。唯一の結びつきはソ連製装備が使用されていることだ。マッカーサーは「偶発的に」米軍がソ連領を爆撃したことに触れているが、ソ連は弁償の請求を控えたといっている。朝鮮北部の発電所はソ連領に電力を供給していたが、その発電所を米軍が爆撃して送電が停つたときもソ連は何もいわなかつたという。そしてプリムソルは、「もしソ連が北朝鮮の南侵を使嚇していたとすれば、ソ連が北朝鮮を放棄して何の援助も与えなかつたという

ことはなかっただろう。そうだとすれば、これはユダの裏切り以来の最大の裏切りだろうとマッカーサーは考えている」と報告している。

また西側のソ連の北朝鮮使噓説では、国連におけるソ連の態度を合理的に説明できない。中国の承認問題でソ連は安保理事会をボイコットしていたが、これをソ連の陽動作戦だったということには無理がある。

国連のことをいうならば、当時国連の諸機関全体に反共主義者がどれほど侵透していたかに留意すべきである。当時の国連本部の職員は三分の二がアメリカ国民で、FBIの厳しい反共監査を受けていた。

当時リー事務総長とアメリカ人職員が準備した資料にもとづいて、国連は多くの決定を行っていたが、朝鮮からの情報は朝鮮に駐在した国連職員からきたものだった。しかしその報告は李承晩とその一派のような信頼性のない、ときにはまったく嘘の筋からの報告にもとづくものだった。

戦争勃発当時、国連は当事者の双方から説明を聞くという基本原則さえ拒否し、DPRKにその機会は許されなかった。一九五〇年秋DPRKはソウルで入手した資料のコピーを国連に送ってきた。北への侵略にかんする李承晩の計画を証明するこれら文書を、米大使館員や顧問たちでこれらを書いたり、受けとった人は真物だと証言した。しかしこれら資料は国連の討議の場からいつの間にか見えなくなってしまった。

国連そのものがアメリカに操作され、選挙で正しく代表されていない、平和を脅かす政権を作り、これに合法性を与えようとしたのである。

朝鮮戦争は「内戦」

西側における朝鮮戦争についての宣伝で特徴的なことは、この戦争を内戦としてよりも冷戦の一部とする反共主義の宣伝が目立つことである。そこでは朝鮮革命運動を重視しようとせず、李承晩の好戦性を極力かくしている。

米軍は朝鮮にいた記者にきびしい検閲を行った。英国では李承晩の残虐行為についてのルポの掲載差止め抗議してカメロン記者がピクチュア・ポスト紙を辞職した。カットフォース記者のナバーム弾についてのルポはBBC放送で削られてしまった。アメリカではマッカーサーの魔女狩りでまず追及されたのはオーエン・ラチモアだったが、その攻撃は彼の朝鮮に関する著書だった。

反共主義は朝鮮の社会を見ようとせず、二つの重要な事実、すなわち北の人民軍が南を、そしてアメリカ軍、国連軍、韓国軍が北を、交互にそれぞれ占領したことの意味を深く分析していない。

朝鮮人民軍は南で共産主義体制を強制して大虐殺を行ったというのが、お決まりの西側のいい方である。DPRK側は、人民委員会を復活し、土地改革、女性解放など改革を実施したが、李承晩の軍はその撤退前に、また再占領後に人民虐殺を拡大したとし、人民委員会の復活の際若干の殺戮があったとしている。詳細は略すが、客観的事実を包括的にいえば、次の通りである。

①朝鮮人民軍は温く迎えられた。これは米軍のデイン將軍の回想記にある。

②北の占領下の行政は、弾圧で弱くなっていたとはいえ大衆的代表性があった人民委員

会に基礎を置いていた。

③朝鮮人民軍は地方の人民を武装し、四〇万から五〇万をその隊列に加えた。これもディーン將軍によれば、いわれているような強制徴募ではなかった。

④人民政権は広範な改革を実施した。短い間に土地改革を実施したという北の主張は無視されているが、一九七三年、多少数字に誇張があるという控え目な注釈つきながら、土地改革の記録が南で刊行されている。

⑤米外交官グレゴリー・ヘンダーソンの記録によれば、一九五〇年秋李承晩政権が再樹立されたあと、「恐らく一〇万以上の人々が」裁判抜きで殺された。人民政権に協力した層の広さ、大きさを示す数字であろう。

朝鮮人民軍が南を占領した期間南にいた新聞記者が三人いた。その一人英国のデリー・ワーカー紙のウイリントン記者は、朝鮮人民軍が到来以前、李承晩が退却するとき、韓国の軍と警察が二〇万ないし四〇万人を殺したと書いている。西側はこれをまったく無視しているが、もう一人の英オプザーバー紙のディーン記者は、ウイリントンから大田で韓国警察が一七〇〇人の人々を射殺したと聞いたとき信じられなかったが、数週間後フランス人宣教師カダルから聞いたと語った。カダルによれば、その現場をアメリカ軍将校が黙って見ていたという。前記李提督は筆者に、南に撤退するとき組織的に政治犯を殺し、その死因を朝鮮人民軍あるいはその地域の共産主義者の行為に見せかける工作をしたと語った。他にも李承晩の警察や軍の残虐行為を示す記録はいくつもある。北の朝鮮人民軍には南の軍や警察のような腐敗はなかったし、日常的残虐行為の記録や証拠もない。たとえば、米空軍の研究調査報告「赤軍に奪取された都市」は朝鮮人民軍による占領下の市民の体験記を集めたものだが、共産主義者による残虐行為を見たという証言は一つもない。

(つづく)

資料2 花束の少女は「真由美」でない!

朝鮮中央通信は三月六日論評を発表し、南朝鮮の「国家安全企画部」が五日、日本共産党の雑誌「グラフ・こんにち」は三月六日号に掲載された赤旗元平壤特派員の撮影写真を「真由美が自分に間違いないと言った」と発表したことにたいし、①花束の少女は「真由美」ではなく、平壤金星中学校の鄭喜善(音訳)である ②鄭喜善は張基榮に花束を渡したと証言した、と指摘した。全文は資料のとおりである。(編集部)

責任転嫁の新たな謀略宣伝

南朝鮮かいらい集団が旅客機事件の責任を共和国に転嫁しようとする新たな卑劣な謀略宣伝に固執している。

五日、「安全企画部」は一九七二年十一月、平壤で開かれた南北調節委員会第二回会議の時、赤旗紙特派員が撮った写真を持ち出して、そこで南朝鮮代表に花束を渡している女子生徒が「旅客機爆破犯」の「真由美」であると発表した。もちろん、今回も彼らは発表が「真由美」自身の「確認」と「陳述」によるものだとつけ加えている。

彼らのこの謀略宣伝に元赤旗特派員まで合流し、「真由美」は南朝鮮代表に花束を渡し

た少女に似ているとか言い出している。南朝鮮かいらい集団が旅客機事件を無理矢理にわれわれと結びつけようと、すでに「真由美」の名前、学歴、家族関係をねつ造して北出身の「工作員」に仕立てている以上、新たなねつ造がなされたとしても驚くにあたらない。われわれは彼らのねつ造劇が余りにも幼稚で、でたらめなもので失笑せざるをえない。われわれは旅客機事件と関連した立場を明白にしたし、事件が独裁集団の自作劇であることが明らかになっている状況のもとで、彼らが何を言おうとも一考の価値もなく、あえてそれに対して説明する必要を感じなかった。しかし、彼らが何か有力な証拠にでもなるかのように日本共産党の出版物に掲載された写真を持ち出してわれわれをひぼうし、自分らのねつ造劇を「認定」してもらおうとしている状況では、その真相に言及せざるをえない。

母、姉弟らも平壤に住む

かいらい集団が開城で南朝鮮赤十字代表に花束を渡したという少女が「真由美」でないように、南北調節委員会第二回共同委員長会議の時、張基栄に花束を渡した別の女子生徒もやはり「真由美」ではない。

当時、張基栄に花束を渡した女子生徒は鄭喜善で、彼女は今も平壤で暮らしている。

張基栄に花束を手渡した時、平壤金星中学校に在学していた彼女は一九六〇年五月七日生まれで、その後金星師範大学を卒業して一九八一年九月から平壤外国語学院の教員をしている。

彼女の父、鄭鐘汝は万寿台創作社の美術家であったが一九八四年一二月に死亡し、母の朴仁淑（音訳）は今も中区域敬臨洞一六班に暮らし、手芸工として働いている。そして鄭喜善の夫は一九七二年に日本から帰国し、現在国際関係大学の研究士として働いている。彼女の第二人と姉一人も平壤に住んでいる。

金星と倉田中学から選抜

鄭喜善は一九七二年一月、南北調節委員会第二回共同委員長会議の時、平壤に来た南朝鮮側代表に花束を渡した女子生徒たちが市内中区域管内の金星中学校と倉田中学校から選抜されたと言い、自分の前に立っている女生徒と一緒に平壤学生少年宮殿舞踊サークルに所属していた友達で、彼女が団長であった李厚洛に花束を渡し、自分は張基栄に花束を渡したと証言した。事実と真相はこうである。

花束を渡した当事者が共和国北半部に厳然として暮らしており、当時の彼女の写真がここにあるのに、彼女が「真由美」だというのはまったくのたわごとである。写真に撮られた人の顔は隠すことも、人為的に造ることもできない。

かいらい集団が「真由美」を無理矢理に「花束贈呈者」に仕立てたこのお粗末な芝居は、世界の人々に「旅客機事件」がどのようにねつ造されたかを示す端的な事例である。「旅客機事件」をわれわれに結びつけたねつ造劇も、まさにこうした方法で仕組まれた。

“対決激化”の正当化狙う

かいらい集団が改めてねつ造品を持ち出して反共和国謀略に血道をあげている目的は明白である。彼らはアメリカの背後操縦と日本反動層との共謀、結託のもとに旅客機事件をねつ造し、われわれを陥れるデマ宣伝に狂奔したが、時間がたつにつれて陰謀者たちの自作劇であることが露わになり、国際世論の糾弾と嘲笑を受けている。

また、宗主らと結託して事件を国連安全保障理事会に持ち出したが、そこでも冷たくあしらわれ、汚れた目的を達成することができなかった。

南朝鮮内でも旅客機事件に対する「捜査結果発表」は「盧泰愚集団がすでに作成したシナリオにもとづいて演出」された。「一片の信びよう性もないねつ造品、自作劇」であると糾弾する声が高まっている。自分の掘った穴に自らはまった身にとって、破綻しつつある謀略劇を復活させる何かの材料が必要だったのである。

盧泰愚一派はこうすることで、共和国の南北連席会議提案に背を向け、南北対決をいっそう激化させて情勢を戦争瀬戸際へ導いている犯罪行為を正当化し、南朝鮮人民の不満にみちた目を他にそらして執権安保を実現しようとしている。

しかし、彼らの打算は愚かである。彼らが破産した謀略劇を成就しようと新たな考案品を持ち出すほど、その謀略劇の底はさらに割れ人々のいつそう大きな糾弾、排撃にさらされるであろう。

道理をわきまえ自重を

われわれはこの機会に、日本共産党と赤旗紙にも一言しておきたい。

一九七二年当時、赤旗紙特派員が平壤に駐在していたのは事実であり、彼が南北調節委員会第二回共同委員長会議を取材したのも事実である。しかし、彼が撮った一枚の写真を取り上げて事実に関わらないことを言い出し、かいらい集団の謀略宣伝に一役買っているのを見ると、精神錯乱症に陥ったのか、買収されたのか理解しがたい。

日本共産党と赤旗紙は、帝国主義者にまるめこまれて道理を分別できず、かいらい集団と手拍子を合わせるのがどれほど恥知らずで醜い行為であるかを悟り、自重した方がよろう。ねつ造者らは自分の手で自らの目を刺す愚かな行為を止めるべきである。

われわれはこうした卑劣な反共和国謀略キャンペーンを絶対に見過ごさないし、世間の公正な世論もそれを許さないであろう。

(注) 資料に掲載した「花束の少女は『真由美』でない！」と題した朝鮮中央通信社の三月六日付論評について、朝鮮総連中央の李珍珪第一副議長は三月一日、東京・千代田区の朝鮮会館でKAL機事件と関連して記者会見をおこない、この論評を裏付ける写真などを公表した。

「朝鮮時報」三月一七日付は、「この子は私です」「平壤で鄭姫善さん証言」との見出しで、具体的かつ詳細に報じている。これにより、南朝鮮安全部が「唯一の物証」として提出した写真はデッチ上げたものであり、赤旗の元平壤特派員が提出した写真の女の子も「真由美」でないことがはっきりしたと同時に、今回のKAL機事件自体が南側による自作自演の謀略であったことが、より明確に証明されたといえよう。

◆ 読者からのおたより ◆

みんなで力を出し合って、わが「社会通信」を不動のものにしたいと決意しています。
(愛知・H)

総評の「九〇年解散」を前倒しし、全通は労働力移動と職歴形成で雇用を守るといつて
いるが、省の活性化計画がだされ、お手々つないで合理化すいしん！ そうさせないため
に力を合わせ闘いを強めていきたい。
(茨城・S)

会社側の国労脱退攻撃は年度末を目前にして強化されています。われわれの体制づくり
が急務です。強制配転の攻撃のなかで残ったメンバーでがんばる決意です。(千代田・A)
私は全通組合員ですが、今の本部分針は現場労働者の実態とかけ離れているように思
います。「社会通信」を運動の糧にがんばりたいと思います。
(京都・K)

小生、北海道教組でたたかっている一人です。二月末に上京するのでお寄りしたいと思
っていますが、どうなりますか。
(旭川・N)

今回の党大会に代議員として参加しましたが、久しぶりの大会参加で右旋回の速さが予
想以上で、危機感を強くしました。今後、真剣に本腰を入れてやり、長期的に党建設をす
めていく所存です。
(旭川・O)

全通組合員ですが右傾化は目をおおうばかり。大阪では「平和宣言」と称して、全郵政
に合併にむけたピラ配布。そこには労働運動を強化しようというのではなく、事業の危
機だ危機だと感情論ばかり。もちろん、下部組合員はおこつてます、イカッテます、やは
り運動は下からつくるしかないようです。
(大阪・K)

日教組大会、社会党大会にかんするコメントは次号あたりにのるのでしょうか。党建協
の健闘ぶりはマスコミ報道からも察することができますが、「全会一致」の方針採択には
首をかしげたくありません。
(埼玉・S)

昨年四月一日に国鉄を退職し、当局の世話にならず自分で職場を見つけました。正義の
たたかいを続ける国労とも密接な関係にあり、馴れない仕事ですが、精一杯がんばって
います。

現在の賃金は国鉄時代の三分の一程度ですが、減額された年金が多少あり、妻と中二・
小六の生活を維持しています。

長年かけ続けた年金がいざ定年となったとき、減額されさらに税金をかけられるのでは
たまりません。高齢者、退職者の生命と暮らしを守るためにも国鉄闘争に参加し、JR会
社の不当労働行為を糾弾して、労働者の権利を守りたいと思います。
(東京・W)

私の職場では、今、労働者を追い出そうとする無人化攻撃がかけられています。このな
かで労組(全電通)はまったくあてにならず、「有志の会」を結成、あるいは社会党に働
きかけ労組の強化とたたかいのもり上げをはかろうと努力しています。

先日、ようやく鳥根県下の有志を結集しての連絡会を結成し、集会をもちました。反動
的な全電通ですが、内部では徐々にたたかいの広がりが出てきています。
(鳥根・I)

忙しさにかまけて、本を読むことが少なくなりました。それでも「社会通信」だけは着
いた日、もしくは翌日には読んでいます。それだけ、当面の課題をはっきり提起してい
からだろうと思います。いつも楽しみに読んでいます。さて、お約束の一部拡大をなんと
か達成いたしましたので、さっそく送付願います。
(鹿児島・N)